

「自分が熱中でき、社会もそれを必要とし、環境にも優しい」ビジネスプラン

本年2月、恒例の『「元気わかやま」ビジネスプランコンテスト 2024 発表会&表彰式』が多くの来場者を迎え、和歌山市内で盛会裡に開催された。同様のコンテストは、県内外で催されているが、9回（年）目となる本コンテストは老舗的存在ともいえ、ここで発表された多くの斬新、有用なプランが事業化されてきた。主催は、わかやま産業振興財団、和歌山商工会議所等7団体による「産業支援セミナー in わかやま」実行委員会で、和歌山県・和歌山市が後援している。

実施要項には、その目的を「県内の創業・起業家、又は本県にふさわしい新たなビジネスプランを発掘し、それぞれの企画や課題、事業段階に応じた経済団体・金融機関等支援機関による専門的かつ体系的な支援を継続的に行うことで、あまたの起業家や新たなビジネスモデルを創出し、地域社会の活性化を図り、『元気わかやま』の実現に寄与する」と記し、一般の部と高校生の部があり、それぞれ賞と副賞が授与される。

昨年9月の締切時の応募数は計65件（一般の部20・高校生の部45）で、前回の24件（一般19・高校生5）を上回った（※高校生の部の増加は、県教委を通じての各高校への働きかけが大きいと思われるが、われわれの時代にはなかった「総合的な学習」や「探究学習」導入の成果でもあろう）。1次、2次の書類審査、ブラッシュアップを経て、発表会では、一般の部4件、高校生の部3件のプレゼンテーション発表と質疑応答、審査が行われた。わたしは、5年前から最終審査にあたらせていただき、起業テーマの広がりや傾向の変化、プレゼンテーション技術やアピールの工夫、そして、特に高校生の社会参加意識の高まりを感じた。

開会挨拶で、実行委員長の大山わかやま産業振興財団専務理事は、「人口減少の顕著な今、今年は特に多くの高校生が参加したことを評価し、次代の担い手達に更なる質の向上を期待する」と述べた。また、後援団体の和歌山県商工観光労働部の田端企業振興課長は、「課題先進県である和歌山県に、起業家の役割は大きく、創業者がたくさん生まれる環境が大事。リスクを恐れず立ち向かっていくアントレプレナーシップ（起業家精神）を持ち続けてほしい」とエールを送った。

今回の一般の部では、「民間企業支援型CSA（Community Supported Agriculture）事業」が最優秀賞に選ばれた。これは、企業における地域貢献の一形態として、契約農家とのマッチングサービスをはかるもので、天候や災害、市場の価格上下等により、収入が事前に予想できないため、事業計画が立てられず、新しい挑戦も困難な農業従事者に対し、企業が一定期間の料金を前払いすることにより、農家は収入の事前確定により、新たな計画も可能となり、安定的な運営ができる。企業は、契約した農地で、社員と家族が週末農業体験等の福利厚生に活用したり、契約農家の製品を提供される等。地元企業が地元産業を支える、リスクを共有する、というモデルケースを和歌山でつくり、この事業の実現を目指すという。

今年のテーマで目立ったのは、福祉や高齢社会、子育て支援に関するもので、一般の部では、「頑張るママを応援！ 地元のおばあちゃんが活躍する託児施設」と題した商店街の空き店舗を活用した元気で体力もある祖母世代が主役の託児所や、「助産師の経営するお母さんのための産後ケア施設」という産後の不安や孤独を抱える母親をサポートする施設、「介護福祉士によるデイサービスでの機能訓練（リハビリ）」、高校生の部では、「Ji & Bar ～ 少子高齢化社会への提案」（時間的余裕と労働意欲をもつ高齢者（爺、婆）の働く機会と多世代交流の場づくり）等々。

表彰式で、審査委員長の日本政策金融公庫の川口和歌山支店長は、発表者全員のしなやかな発想を称え、「すぐに事業化可能なものもあれば、実証実験はこれから、というものもあるが、夢の実現を社会課題の解決につなげてほしい」と講評を述べた。彼らの思いが結実するよう見守っていききたい。

（谷 奈々）